

ロディ・ドイルの『ドアにぶつかった女』を読む

—現代アイルランドの閉ざされたドア—

戸 田 勉

Reading Roddy Doyle's *The Woman Who Walked into Doors*:
The Closed Doors in the Modern Irish Society

Tsutomu TODA

2014年11月21日受理

1. はじめに

1993年に『パディ・クラーク ハハハ』(*Paddy Clarke Ha Ha Ha*、以下『パディ・クラーク』と略記する)でブッカー賞を受賞し、本格的な小説家として脚光を浴び始めたロディ・ドイル(Roddy Doyle、1958-)は、その年BBCからの依頼を受け、アイルランドの労働者階級の家族を描いたテレビドラマの脚本に取り組んだ。翌年、これが『ファミリー』(*Family*)という題名で放映されるのだが、ドイルは、その後すぐにこのドラマの小説化を思いつき、二年後の1996年、ドラマの主人公のポーラ・スペンサーの半生を描いた『ドアにぶつかった女』(*The Woman Who Walked into Doors*)を完成させた。さらに、2007年には、ポーラ・スペンサーの十年後の姿を描いた『ポーラ・スペンサー』(*Paula Spencer*)を上梓している。ひとりの人物の物語にテレビドラマの脚本一本と二冊の小説を発表したことから、ドイルにとってポーラという人物がいかに特別な存在であったか容易に想像できる。彼女は、ジミー・ラビット——『ザ・コミットメンツ』(*The Commitments*, 1987)、「ザ・ディポーターズ」(“The Deportees,” 2007)、「ザ・ガッツ」(*The Guts*, 2013)の主人公——と並んでドイルの愛着が深い人物であると言えるだろう。

ポーラが最初に登場する連続ドラマ『ファミリー』は四部構成から成り、一話ごとにダブリンの北部の労働者住宅に住むポーラの家族ひとりひとりの物語が紹介される。第一部「チャーロ」は、家庭内暴力を振るう夫チャールズ・スペンサー

(通称チャーロ)に、第二部「ジョン・ポール」は、反抗期を迎えた長男のジョン・ポールに、第三部「ニコラ」は、父と対立しながら縫製工場で働く長女ニコラに、第四部「ポーラ」は、夫の暴力によりアルコール中毒になったポーラに焦点が当てられる。しかし、家庭内暴力やアルコール中毒といった過激な内容故に放映後は嵐のような反感や批判が浴びせられた。(Firetog 74-5)

しかし、ドイルはこの脚本を書いているうちにだんだんとポーラに対する愛着が増し、これを小説に書き直して出版しようと決意する(White 156)。小説化による大きな変更点は三つある。ひとつはストーリーが扱う時間の変更で、テレビではポーラとチャーロが結婚し、四人の子供がいる現在だけを描いているのに対し、小説ではポーラの幼年時代から39歳になるまでの半生を扱っている。また、小説では、ポーラの反乱によって家を追い出されたチャーロのその後も語られており、家を出てから一年後、彼が銀行員の家押し入り、その妻を人質にして、その夫に銀行から金を奪わせる計画を立てるが、失敗して警官に射殺される事件が背景として付け加えられている。小説では、警察から夫の死を知らされたポーラが、自分の過去を振り返り、子供時代、学校生活、結婚、子育て、そして最後にチャーロとの決別をする日を思い起こしてゆく。

もうひとつの変更は、テレビドラマでは家族それぞれに焦点化されていた語りだが、小説ではポーラにひとりに統一されたことである。これによってポーラの内面がより深く詳細に語られることになり、家族関係の背景が鮮明に浮かび上がる。たとえば、チャーロとの出会いや結婚するまでの幸せな思い出が細やかに綴られることで、テレビでは単なる悪漢としてしか見えなかったチャーロの人物像に深みが生まれている。しかし、ポーラが自らを語る語り、いわゆる一人称の語りでは、語られる内容の信憑性の問題が生まれており、これが物語の展開をさらに複雑にしていることも事実である。

小説への変更の意図が端的に現れているのが題名の変化である。テレビドラマの創作意図について、ドイルは危機にある家族がそれぞれの視点から語られるドラマを書きたかった(White 155)と述べているが、その狙いからすれば『ファミリー』というタイトルは妥当なものだった。同じテーマで小説化する場合でも、この視点だけの変化であれば、この続編として出版された『ポーラ・スペンサー』という題名でもよかったはずである。だが、ドイルはあえて『ドアにぶつかった女』という奇妙な題名を選んだ。

「ドアにぶつかる」(“run into the door”)という表現は、ポーラが殴られた傷を病院に治療しにゆくときに夫の暴力を隠すために使った言葉である(181)⁽¹⁾。しかし、元はチャーロが自分の暴力の事実を隠蔽し、相手のせいにするために押し付けた表現のひとつだった。だが、ポーラは徐々にその言葉を受け入れ、自らを「ドアにぶつかる女」と見なして自己卑下してゆく(187-9)。つまり、この表

現は家庭内暴力の事実を隠し、その原因を相手に負わせて自尊心を失わせる精神的な暴力をも意味している。この題名の変更には、単なる肉体的な暴力だけではなく、その事実を表に出せない夫婦関係の歪みや妻の叫びが聞こえない社会制度の欠陥をも浮き彫りにしようとする作者の意図が隠されていると考えることができるだろう。

したがって、この小説の中の「ドア」は単にポーラが物理的に衝突する扉ではなく、精神的に、あるいは制度的にぶつかる障害などの重層的な意味を持った言葉とみなすことができる。そこで本稿では、この「ドア」とポーラとの関係をたどりながら、その意味を整理し、ポーラの成長を阻み、人生の壁となって立ちどかかったアイルランド社会の「ドア」について論じてみたい。また、この小説の中で年代が正確に記録されている点に注目し、語り手であるポーラが語る「今」の世界が、なぜ1995年に設定されているのか、その時代背景について考察し、小説との関係を論じてゆく。

2. ドアとポーラ

『ドアにぶつかった女』の冒頭は、「ひとりの警官が玄関のドアのところに来たことでわたしにはわかった」(1)というポーラの家玄関のドアの場面から始まる。ここでポーラは、若い警察官の戸惑った表情からチャーロが死んだことを見抜き、自分が暴力的な夫から解放されたことを知る。そして、その解放によって自分の人生の意味を問い直す機会を得て、その半生を振り返りながら過去を再構築してゆく。

この再構築で鍵となる表現が「ドア」である。特に、二ページにも満たない第一章ではこの語が七回繰り返され、それが単に物理的に玄関の入り口を指すだけではない含みを持った言葉であることを物語っている。「何年もの間、玄関のドアを開けることが怖くてたまらなかった」(1)というポーラの独白が暗示するように、ここではドアは、ぶつかるためのものではなく、外界からの悪い知らせやチャーロの暴力から自分と家族を守る防御壁であった。また、反抗期を迎えた長女のニコラとのぎくしゃくした関係も玄関のドアをめぐる対立を通して提示される。ニコラにとって玄関のドアを開けようとする母親は彼女の成長を妨げる障害となっていたのである。また、暴力の被害者であったポーラが、逆に加害者となっていることも見逃すことはできない。

一番上のニコラは家に入るとき絶対に裏口から入ろうとはしなかった。玄関のドアを通りたがった。その方が大人だから。彼女は一分間に十回も玄関のベルをならした。

— 上着忘れた。

— お金忘れた。

— このジーンズ気に入らない。

わたしは娘をひっぱたいた。12歳か、13歳でひっぱたかれるには大きすぎたけれど。(1)

このように小説の冒頭では、家の入り口であり、出口でもあるドアは、家族を守る一方で、閉じ込めもする存在として象徴的に描かれる。そして小説の結末近くで、ポーラが、「わたしはドアから出て行けなかった。だから、代わりに夫をドアからたたき出したのだ」(214)と告白するとき、そこに家族を守るために長い間自分を支配していたドアから解放されようとする彼女の強い決心を読み取ることができる。このように、『ドアにぶつかった女』はドアから始まりドアで終わる小説であるとみなすこともできるだろう。

ポーラが最初にドアとトラブルを起こすのは、結婚前にチャーロの家に初めて訪れたときである。なぜか家の裏口から入らなければならない上、酒を飲んだ後に立ち寄ったため、トイレに駆け込まなければならない状態だった。ポーラは、裏口のドアを閉めようとするものの、「うんとすんともいわなかった」(65)ため、結局トイレに間に合わず、廊下でもらしてしまうのだが、この場面はポーラとチャーロの家族との相性の悪さを象徴する場面となっている。また、英語の諺によれば、「裏口は泥棒と不身持ち女を作る」と考えられているので(ド・フリース 184)、この出来事は皮肉にもポーラの結婚後の社会的な評価を暗示しているとも考えられるだろう。この裏口との関係が冒頭でニコラが裏口を使うのを嫌がる場面とモチーフ的に結ばれていることは言うまでもない。

ドアはポーラにとって常に悪い思い出と結びついていたわけではない。結婚して三人の子供に恵まれ、手狭になったフラットから引っ越すために新築の家を見に行ったときの至福の時間を彼女は決して忘れることはなかった。

あの日のことはどんな小さなことでも覚えている。(数日後の引っ越しした日のことは何も覚えていない)。全部を。そして覚えていることがすべて本当だと信じている。[...] 帰るときにドアを閉めた。帰りたくなかった。そっとドアを閉めた。わたしたちの新しいドア。チャーロがわたしの背中に手をあてていた。ニコラはわたしの足にからみついていた。ジョン・ポールはチャーロの肩に頭をもたせかけてぐっすり眠っていた。(195)

このときの「わたしたちの新しいドア」が、その後のポーラに家庭内暴力の悪夢を味わわせる牢獄の扉になるのだが、「数日後の引っ越しした日のことは何も覚えていない」という一節には、その予兆が仄めかされている。

ポーラが「ドアにぶつかった女」になるのは、チャーロにお茶をいれる、いれないというほんのささいな口論からだった。初めての妊娠のために、肉体的にも精神的にも疲労が溜まりはじめ、怒りっぽくなっていたポーラは、外で遊び始め、帰宅が遅くなることが多くなったチャーロに我慢ができず、「お茶くらい自分でいれたら」と軽く言ってしまう。だが、この一言が彼の逆鱗に触れ、この瞬間からポーラの「未来が目の前でとまってしまった」(168)。そして、チャーロが娘に暴力を振るうことを確信し、彼女が反撃に転じるまでの17年間の間、ドアにぶつかり続けたのだった。いくら夫の暴力から逃げようとしても、家のドアは彼女の行く手を遮り、ついには凶器と化してゆく。「わたしがドアを開ける前に、チャーロがわたしをドアに激しくたたきつけた。殴られてドアから倒れた。わたしはガラスが顔の上にふりかかってくるのを待っていた」(210)。

小説の後半部の家庭内暴力の描写は凄まじく、この小説の前半部に描かれた二人の恋人時代の幸福感とコントラスを成して一層際立つ。ドイルの作品には暴力が描かれることが多いが、その凄惨さという点では『ドアにぶつかった女』を凌駕するものはない。ポーラに焦点化された現在時制の語りと短いフレーズの連続が描写をさらに生々しくしている。

— このくそ女！

頭がひっぱられる。

— こんちくしょう。

押し倒され、隅に追いこまれる。髪が抜かれる。鋭い痛み。あの人の靴が私の腕に食い込み、ナイフで切られたようになる。わめいている。壁に片手をつく。腕を押さえている私の指を蹴り上げる。[...] あの人が私の上ののる。またわめくと、あごをひっぱたく。頭が後ろに吹き飛ぶ。ばらばらになる。もう一発。また一発。わたしは身体を丸める。目をつぶる。背中が狙われる。また一発。背中。背中。背中。背中がばらばらになる。(183-4)

チャーロの暴力に耐えかねたポーラは、何度もドアの外へ足を踏み出そうとするが、「わたしは何度も玄関のドアの前に立った。ドアを開けた。前に進みだした。庭に。それ以上は無理」(206)と考えて、先に進むことができない。ドアはポーラにとって家族との最後の絆になっているからである(209)。そして、絶望の闇の中で、この家には出口となる「ドアが存在しない」(212)ことに気づき、酒に溺れてゆくのがあった。

ここで看過することができないのは、チャーロは暴力を振るいながらも同時に彼女を愛してくれる存在だとポーラが信じている点である。殴った後に気遣う言葉をかけたり、ポーラの身体を心配して病院へ連れて行ったりするなど、チャー

ロには彼女に対して優しく振る舞うところがあり、ポーラはそれを彼の愛の証として信じてゆく。そして、その暴力を愚かで無力な存在である自分に対する愛情表現と考えて、自己犠牲を強いてゆくのだが、ここには激しい暴力をふるう男性を理想化し、その相手との関係にしがみつこうとする「ストックホルム症候群」(西沢 565) の症状を読み取ることもできるだろう。また、支配されることによって相手を支配しようとする共依存の関係も垣間見える。

あの人はわたしを粉々にした。破壊した。でも、あの人を愛し続けた。荒れていないときのあの人が大好きだった。ありがたく、とてもうれしかった。あの人のためなら何でもしただろう。愛していたし、あの人も愛してくれた。[...] あの人はすべてであり、わたしは無だった。わたしが怒らせた。馬鹿だったから。忘れてしまうから。あの人が必要だった。(177)

暴力的なチャーロと愛情深いチャーロという「二人のチャーロを作り出すことができない」(193) ポーラは、彼の暴力を受け入れてゆく。だが、チャーロが銀行強盗を計画し、銀行員の家に押し入ったときに、その妻であるフレミング夫人に暴力を振るったことに強い違和感を覚える。「ミス・フレミングは顔を二回殴られていたが、性的暴行を受けた痕跡は残っていない」(156) という警察の検死報告を知ったとき、ポーラはなぜチャーロが夫人を殺す前に殴ったのか、しかも、性的暴行もせず女性を殴ったことがまったく理解できなかった。彼女にとって、暴力はチャーロの愛情表現であり、それが自分ではない女性に向けられたことに戸惑いを覚えたのである。もし、レイプ目的の暴力であればポーラは納得しただろうが、純粹に他の女性を殴ったことが許せなかった。しかし、この事実をポーラは受け入れようとはしない。彼女が作り上げたこれまでのチャーロとの物語が瓦解してしまうからである。(この理由については、次章で考察する)。

でも、なぜ、かわいそうなフレミング夫人を殴ったのだろう。チャーロは彼女と結婚していたわけではない。なのに二回も殴った。どうしたのだろう。

心の中にその答えが現れるのが嫌だった。わたしは押し殺した。恐ろしすぎる。野蛮で残酷な答えだ。汚くて胸が悪くなる。わたしの結婚生活を、愛情をあざ笑った。これまでの人生をすべてを。(158)

ポーラは絶望の淵で出口の見えないままドアにぶつかり続けていたが、決して希望を捨てることはなかった。これはドイル自身も指摘している点で、ポーラは17年の虐待を受け、アルコール中毒にはなっているが、掃除婦として経済的な独立をし、子供たちの教育に責任を持つことによって、将来の道を切り拓こうと

している（White 154-5）。ホワイトはこれを「人間らしさの回復力」（140）と呼んでいるが、社会の底辺に生きる人間のたくましさは、ドイルの世界の重要なモチーフでもある。

わたしはあきらめなかった。

わたしはここにいる。

立ち上がった。顔についた血を洗い落した。やかんを火にかけた。

もう少しであきらめるところだった。死にたかった。[…]

それでもわたしは起き上がった。いつだって立ち上がった。子どもたちがいる。夫がいる。（205）

ポーラのこの回復力は、最終的には、チャーロをフライパンで殴りつけ、家から追い出すときの「バイオニック・ウーマンのような」（213）力につながってゆく。ある朝、彼女は夫の長女を見る目つきに、今まで自分に向けられてきた冷たい憎悪をとっさに読み取り、今この瞬間にニコラに暴力が振るわれると直感的に察知する。ニコラも同じ危険を感じて目でポーラに助けを求めると、ポーラは手元にあったフライパンでチャーロの側頭部を躊躇なく、手加減なく殴りつけるのだった。不意を突かれたチャーロはなす術もなく、ドアから蹴りだされてしまう。「わたしは夫をたたき出した。これは生涯忘れられない。あのとときの興奮と恐怖。本当に気分がよかった」（213）。

子供への愛情が夫の暴力に勝利するこのクライマックスは、少しコミカルな描かれ方をしているために暴力的な印象が薄くなっているが、最後にポーラ自らがフライパンを手にとってチャーロを殴りつけている点は重要な意味を持つ。暴力を止めるためにポーラが選んだ手段は暴力以外なかったのである。ここで、小説の冒頭でポーラがニコラを引っ叩く場面を思い出すと、この小説が暴力で始まり、暴力で終わっていることに気付くだろう。チャーロがいなくなっても、暴力の連鎖が途絶えることなく続くことが暗示されている。また、チャーロが警察に射殺される展開についても、悪を止めるためにはより大きな力の行使しかないという皮肉な結末とみなすこともできる。

3. 現代アイルランドの閉じられたドア

『ドアにぶつかった女』には、暴力そのものの解決策は見当たらない。だが、ポーラのようなケースがなぜ起きたか、その原因となるものをたどることができる。それは、ドイルが「アイルランド人の視点から見て、今まで書かれることがなかったもので、書かれなければならないもの」（White 173）、つまり、現代アイルランド社会が抱える歪みやひずみである。この小説は、それまでの作品に比べて音

楽などのエンターテインメント性が薄く、その分社会批判的な要素が濃くなっているのが特徴であるが、観光案内書や歴史書などに載っているステレオタイプのなアイルランドではなく、一般に知られていない本当のアイルランドを提示することを意識していたドイルにとって、『ファミリー』や『ドアにぶつかった女』の執筆は、ダブリンの労働者階級の真の姿の創作する上で格好の機会となった。そして、20世紀末のアイルランドの教育、宗教、医療、失業といった社会的な問題が、家庭内暴力に苦しみ続ける女性の視点から生々しく語られてゆく。

教育の問題は、ポーラの中高等教育時代の思い出の中で描かれる。初等教育時代には、物語を作ることが得意で成績もよかったポーラではあったが、「あの豚小屋のような学校に足を一步踏み入れた途端、わたしは変わらざるを得なかった」(35)、そして、「わたしたちは子どもだったが、動物に変身した」(36)と回想しているように、この学校の劣悪な環境がいかに関女の成長に悲惨な影響を与えたかがわかる。入学と同時に成績によってクラスが編成されるのだが、ポーラは下から二番目の六組に入れられ、「校舎のドアを開ける前に自分が馬鹿だと知って衝撃」(28)を覚える。また、思春期の繊細な感覚を持った生徒を相手にしなければならぬ学校で教壇に立つのは、やる気のない、「全員ろくでなし」(26)ばかりだった。ここで生き残るためにポーラは自分を変える必要性を痛感し、意識的にワルになり(39)、悪態をつき、荒れてゆく。しかし、彼女の心の奥底では、自分が別な学校に通ったり、もっと優秀なクラスに入っていたら、このような人生を送らなかつたらうとも考える(41)。

本格的に作家活動を開始する前に教鞭を執った経験を持つドイルにとって教育は身近で深刻な問題であったにちがいない。前作『パディ・クラーク』では、初等学校での愛国主義的な授業、旧態依然のカリキュラム、あるいは体罰など、どちらかといえば、昔から存在する一般的な問題を扱っていた。しかし、『ドアにぶつかった女』で取り上げられる専門学校の教育は、生徒の人間性を否定し、尊厳を失わせる現代アイルランド社会の病巣として描かれる。そのような学校に三年間通い、自尊心を失う教育を受けたポーラにとってチャーロのような人間が救世主のように見えたとしても何ら不思議ではなかつたらう。

ポーラと同じ時代にダブリン北部の労働者階級に生まれたドイルは、中等教育の無償化(1969年)という新しいドアが開かれたことにより、労働者階級から中流階級に上昇できたと語っている(White 177-8)。だが、ポーラやチャーロのような階層の人間にはそのドアさえも開かれてはいなかつたのである。

ポーラの苦悩に対して教会も助けの手を伸ばすことはなかつた。司祭とは二か月に一回、教区内の捨てられた妻が集まる集会で会っていたが、彼女は「本質的な部分で司祭が信用できない」(90)と感じていた。ローマ法王が「ヨーロッパにおける最後の砦」(Ardagh 12)と呼んだアイルランドでポーラのような意見

は例外的にみえるかもしれないが、ドイルによれば、労働者階級の世界では司祭の存在は希薄であり、司祭が家庭を訪問しても、歓迎されることはなく、それこそが本当の 아일랜드 の姿だという (White 169)。ここでもたたくべきドアはあっても、ポーラに開かれることはなかったと言えるだろう。

医者もポーラのような人間には冷たかった。殴られ、蹴られ、歯を折られ、指を折られる度に病院に運ばれるが、医者はポーラの問題に立ち入ろうとはしない。さらには、救急外来の女医に「あなたのような人たちが私の時間を無駄にしているのよ」(190) と厄介者扱いをされる。ポーラは治療室の前のカーテンに向かって何度も助けを求めようとするが、その薄いカーテンでさえ壁のように立ちはだかっていた。教員にも、司祭にも、医者にも彼女の声に耳を傾けて手を差し出すような人間は誰ひとりいなかった。

きいて。

大病院で。

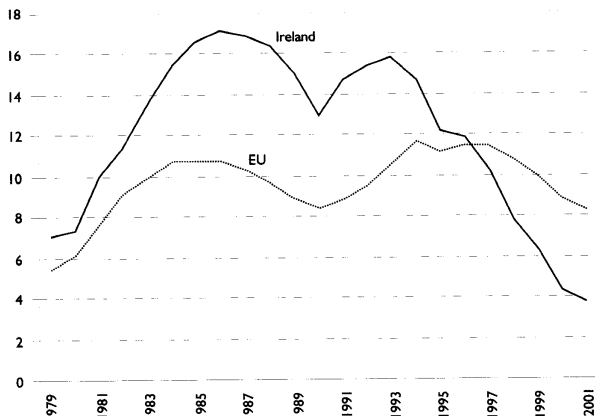
お願い、きいて。

クリニックで。

教会で。

きいて、きいて、きいて。折れた鼻。欠けた歯。ひびのはいったあばら。お願い、きいて。(187)

チャーロやポーラのような社会の底辺に生きる人間たちをさらに苦しめたのは失業問題だった。チャーロもポーラも結婚前から仕事に就いており、結婚前にはある程度の貯金もしていた。ふたりが結婚した 1976 年頃は、ダブリン中心部の再開発のため、郊外に市営住宅の建築ラッシュが続いており、「新聞は熟練労働者の求人広告で溢れていて、現場に行って、現場監督に声をかければそれで済んだ」(132) 時代だった。しかし、この時期が終わると、アイルランド全体が不況に見舞われ、90 年代に入ると失業率も一気に 17% まで上昇する (図表参照)。このような経済的な背景の中で、職を失ったチャーロ



図表. アイルランドと EU の失業率 1979 - 2001 (Clinch 27)

が窃盗をはじめ、最後は銀行強盗を企て死んでゆくのである。

『ドアにぶつかった女』の中で年代が正確に記されているのはこの小説の大きな特色であることはすでに触れた。ポーラの記憶によれば、彼女は76年に結婚し、17年間暴力に耐え、93年にチャーロを家から追い出し、94年に彼が射殺され、そして95年の今、過去を整理しながら物語を語っていることになる。90年代中頃から「ケルティック・タイガー」と呼ばれる未曾有の好景気がアイルランドに沸き起こり (Coulter 3)、一気に失業率が低下するが、チャーロもポーラもその恩恵に預かることはなかった。ふたりの悲劇はまさにこの失業率の上昇曲線と符合する。また、失業状態にあるという点では、80年代後半を舞台にした『ザ・コミットメンツ』の若者たちや90年代を舞台にした『ザ・ヴァン』(The Van、1991) のジミー・ラビット・シニアもチャーロの系譜に属していると言えるだろう。

このような背景からチャーロを社会的犠牲者と見なすことは簡単である。しかし、それが直接のチャーロの暴力の原因であるかどうか判断を下すことはできない。ポーラは、チャーロのある種の才能を認めており、「もう少し違っていたら、何か大きなことをしただろう」(191) と信じていた。だが、その一方で失業したことが原因で暴力を振るったのではないことも理解していた。

チャーロ・スペンサーは失業し、妻に暴力を振るいだした。そう言いたいところだけどそんなに単純じゃない。彼は盗みを始めた。女性を撃ち殺した。なぜなら仕事につけなかったから。社会に拒絶されたから。そんなに簡単に片付けられたら、どんなにいいだろう。(192)

チャーロの暴力が不況とは無関係だとしたらそれはどこから生まれるのだろうか。先にも触れたが、チャーロがフレミング夫人を殴った理由について考えていたポーラは、その答えが閃いたとき、それはふたりの愛を侮辱するものだとして受け入れることができなかった。ポーラにとって暴力はチャーロの愛情表現と信じていたからである。ポーラはその答えを直接に教えようとはしないが、彼女が構築する家族の物語の中にその答えの鍵が隠されているようにみえる。それは父親との関係である。

ポーラは自分の過去を振り返るとき、ひとつだけ確認しなければならないことがあった。それは「お父さんはいい人だった」(59) という妹のデニーズからの保証だった。その保証により、彼女は、「崩れることのない過去の上をしっかり立つことができ」(59)、過去を再構築することができるのだった。しかし、「お父さんはいい人だった」というデニーズの言葉は本心から出たものではなかった。実は、長女のカーメルが長い間父親から暴力を受けており、姉妹たちはそれを知っ

ていたからだった。

カーメルはいつもお父さんと闘っていた。[...] 長女だったのでわたしたちのことまで闘わなければならなかった。闘い——まったくあれは戦争だった。お父さんはカーメルの洋服を破った。最初の給料で買ったブラウスに火をつけた。風呂場まで引きずっていった。つめ用のブラシでカーメルの顔を洗った。(46)

ポーラは父親のこのような虐待を目の当たりにしていたはずだったが、過去を振り返るとき、この記憶を抹殺しようとした。彼女の語る物語では暴力をふるう親に育てられた娘が、同じように暴力を振るう夫に出会って結婚するという筋書きは成立し得なかった。自分が母親の二の舞を演じることを自ら語ることになるからだった。ポーラがチャーロをフライパンで殴って追い出すのも、父がカーメルにしたことをチャーロがニコラに繰り返すことだけは絶対に許せなかったからだった。このように考えれば、物語の最後に見せたポーラの突然の豹変が理解できるだろう。しかし、過去を作り上げようとする彼女には、「昔々、わたしの人生はバラ色だった。お父さんとお母さんはわたしを愛してくれた。家には笑いが絶えなかった」(56) というおとぎ話が必要だった。それゆえ、父親の「歴史を書きかえる」(56) 必要があったのである。

チャーロが暴力を振るう理由について、ドイルは、男性が女性を殴る理由は非常に複雑であるが、この本では浅薄な社会学的考察の穴に落ちないようにうまく書くことができたと述べている (McCarthy 187)。階級や不況といった社会的要因は間違いなくチャーロの転落と深く結びついているが、ポーラの父親の場合を考え合わせた場合、家庭内暴力の原因は、むしろアイルランド社会に深く根付く家父長制社会の闇、そこに生きる男の性と深く関っているのではないだろうか。『ファミリー』が放映されたときに、視聴者からなぜポーラはあんな男と結婚したのかという批判が多く寄せられたというが (White 156)、そこには虐待する夫ではなく、虐待される被害者に責任を負わせようとする古い社会通念を看取することができる。ドイルがチャーロやポーラの父親の暴力を通してあぶり出したかったのは、この男性優位社会の病弊と考えることがもっとも妥当に思われる (McCarthy 173)。

『ドアにぶつかる女』の前作『パディ・クラーク』にも、パディの父親が母親を殴る場面があるが、十歳の子供にはその理由がわからない。「父ちゃんが母ちゃんをぶった。顔をなぐった。バシッと。その場面を想像してみようとした。なぜなぐったかかわけがわからない」(269)。39歳のポーラも、父親がなぜ姉に暴力を加えるのか、チャーロがなぜ自分だけでなく、他人であるフレミング夫人ま

で殴るのか理解できない。それはポーラやパディの理解を超えたところにある、アイルランドの男性社会の理不尽な了解事項だからである。

この家庭内暴力の問題は、この物語の現在である1995年の歴史的な意味と結び付けると別な様相を呈する。アイルランドではこの年は、離婚を合法化するための第二回目の国民投票が行われ、賛成側が0.5パーセントという僅差で勝利を収めた記念すべき年だった。イギリスからの自治を獲得し、カトリックの信仰とゲール文化を軸に据えた国家建設を目指したアイルランドは、1937年の新憲法の中で、女性を家庭の中の従属的な地位に置いた。その結果、女性は家庭を守り、男性のために尽くすものとされ、避妊も中絶も離婚も否定されることになった。そのような男性中心社会からの脱却の大きな一歩としてこの国民投票の歴史的な勝利を位置付けることができる。だが、ポーラの物語には、この国を二分した国民投票の情報はまったく聞こえてこない。また、この国民投票は1986年に第一回が行われているが、そのとき気配もまったく感じられない。ドイル自身が第二回の国民投票の際に賛成側に立って積極的な活動を行っていた事実を鑑みると、この沈黙は意味深い。そこには、ポーラのような人間を救うための社会運動の声を実際はまったく届いていなかったというアイルランド社会の深刻な現実が隠されているようにも思える。少なくとも、『パディ・クラーク』と『ドアにぶつかった女』には、家庭内暴力と離婚の問題が通奏低音として流れ続けていたことだけは事実である。

4. 『ポーラ・スペンサー』へのドア

『ファミリー』の最後の場面では、ポーラは家族で食事をするときにジョン・ポールに食前の祈りを捧げさせる。そして、ジョン・ポールは戸惑いながら、ただただ祈りの言葉をつぶやく。これは家族関係を再生させようとするポーラの積極的な試みと解釈することができるだろう。しかし、小説ではそのような場面は存在しない。チャーロを追い出したときのニコラとの少し勝ち誇った会話が二度繰り返されるだけである。ポーラはここで語りをやめるが、彼女がそれまで構築した過去が純粋な事実だけに基づくものではなく、虚構が混ざり合ったおとぎ話に過ぎないことにいつか気づく日がやってくることは明白である。というのも、自らの過去を語ることによって再構築しようとする「今のわたし」と語られる物語の中にある「過去のわたし」とが整合せず、自己像が崩壊する恐れがあるからである。ポーラは記憶について、「わたしは思い出を選ぶことができない。作り話なんてできない」(197)と言うが、その一方で、父親に関する歴史を捏造していることも事実である。「痛みが消えるとすべて忘れてしまう」(164)という看護士の言葉はポーラの物語には本質的な欠陥があることを示唆している。この意味では、彼女が小さい頃物語を話すのが得意だったという告白は極めて暗示的で

ある。

ポーラはもう一度自分の過去と向き合い、改めて自己再生を図らなければならない。彼女がそのことに気付き、アルコール中毒を克服するにはあと十年の歳月が必要だった。十年後に新たに『ポーラ・スペンサー』が語られるとするならば、それは「わたし」が「今」の時点から過去を思い出して語る過去形の「おとぎ話」ではなく、物語世界の「今」である 2005 年を同時に生きながら、成長の歩みを一步一步記す現在形の「物語（記録）」でなければならなかった。

註

- (1) 本稿では、*The Woman who Walked into Doors* (Viking, 1996) のテキストを使用し、引用の際には括弧内にページ数を記載する。

引用参考資料

- Ardagh, John. *Ireland and the Irish: Portrait of a Changing Society*. 1994. London; Penguin, 1955.
- Clinch, Peter, Frank Convery, and Brendan Walsh. *After the Celtic Tiger: Challenges Ahead*. Dublin; The O'Brien Press, 2002.
- Coutler, Colin. "The end of Irish history? An introduction to the book." *The End of Irish History: Critical Reflection on the Celtic Tiger*. Ed. Colin Coutler and Steve Coleman. Manchester; Manchester U P, 2003.
- Doyle, Roddy. Family. Dir. Michael Winterbottom. Perf. Sean McGinley, Ger Ryan. BBC, 2011. DVD.
- . *Paula Spencer*. 2007. London: Vintage Books, 2006.
- . *Paddy Clarke Ha Ha Ha*. 1993. London: Vintage, 1998.
- . *The Woman Who Walked into Doors*. New York: Viking, 1996.
- Firetog, Emily. "Interview with Roddy Doyle." *Columbia: a Journal of Literature and Art*. 50 (2010): 64-80. www.columbiajournal.org/wp-content/uploads/2012/05/doyle.pdf
- McCarthy, Dermot. *Roddy Doyle: Raining the Parade*. Dublin; The Liffey Press, 2003.
- White, Caramine. *Reading Roddy Doyle*. Syracuse: Syracuse U P, 2001.
- ド・フリース、アト『イメージ・シンボル事典』 山下主一郎主幹 大修館書店 1984年.
- 西澤哲「ドメスティック・バイオレンス」『最新心理学事典』監修藤永保 平凡社 2013年.